

重修真書太閤記

十一編

六

晴

			三四〇五三	和書門
		二二六	三	
四〇	三一	二六	三	
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	內	
一七		三四〇五三		和
函		三		書
一	四〇	三		
二架	冊	號	類	

內閣文庫			
番號	和	34053	
冊數	40 (36)		
函號	171	45	

第

共四十



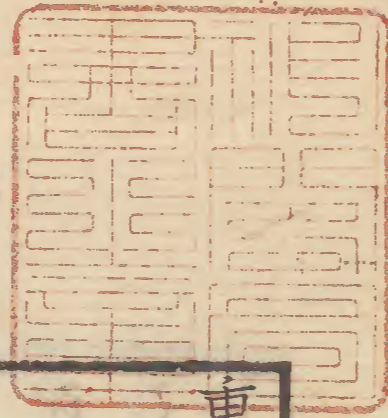
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





重修真書太閤記十一編卷之十六

山中合戦敗軍の事

并井伊直政先陣の事

山中やまなかの城主じゆうしゆを松田兵衛大夫康長やまとうが父ハ筑前守
 康定やすまことといふ由原藤太秀郷ひらふらふぢうの二十二代の孫まごにして
 山中三万二千貫文を領りやうせといふ加勢かぜいハ北條左衛
 門大夫氏勝うぢかつ間宮豊前守好高こうかう朝倉能登守政元まさもとが
 去さるはみ松田間宮まつかたの間みやとやうち死ししたるハ左衛
 門大夫氏勝うぢかつハ本丸より敵てきをむらひはいて出追でしゆいひ
 ひらひつ命いのちをおよまひ數刻かずこくのたくかひみまゝまゝ

とハミルとハ一足もひくとおろく。竹助も思ひ
 切て、かけいさかけ入たりける。上方勢松田間
 宮、打死せしより、本城へ切入んとせし。倉を破
 り、財寶を分捕しけふ。不ど、左衛門大夫あり。静
 かよ。本城よひさいル。自害せんとおしけふ。久間
 宮能登守、木村三河守、堀口日向守をとりめ。氏勝の
 弟北條新八郎、同新三郎をせきこり、軍のあらひ勝
 負ハ、かくあへ。あふへ。必定かひべさ。そのふもあ
 らひよく。負ても始終負へさ。よあらひ。此城あぢか
 く攻やふらば、いおと。又運をひらくへ。時節あ
 したもいふへ。からひ。一まの落させたすへ。やと引

立ち下せんとせし。かくおろく。夜もゆき終て。城を出ひ。出
 とも。流石。小田原へおはん。面目か。と。や。お。ひ
 かん。一族郎従十八人。髻をさ。久野をめぐり。甘繩
 の城へ。おも。けり。この左衛門大夫といふ。早雲
 寺入道の末子。入道。入道の弟。おろく。め。ハ。左
 馬頭氏時といひ。おれ。ハ。七十四五。おも。あ。ま。の。へ
 一。ま。か。は。ま。甘繩。おも。おも。ま。あ。く。み。く。せ。め。く。北國勢
 を。み。せ。さ。か。ふ。な。ぬ。時。ハ。城。を。ま。く。ら。ま。討死。と思ひ
 切て。居た。お。ひ。け。ろ。処。へ。氏政。父子。より。栗田兵衛丞
 使。む。く。て。山中。おも。て。の。御。を。く。ら。ま。全。く。金吾の末
 練。り。を。ひ。く。お。の。あ。ら。ひ。お。ろ。く。落城。を。お。と。す。く

取辱と申へから以てやく小田原へ御入ルへと度
 たび仰らむしよかとも氏勝たぐこの城を枕ふとの
 返事してはら子小田原へ参るへといふれを
 栗田小田原へもさかへり九衛門大夫殿の御心
 かさりとおなえのききかき御使まかりし實
 否うけたまをり切いよく御二心みゆをき
 ちから御志方いとあげやへくと申けふと氏政聞
 たまひかの金吾ハ一族の内乃長者おろ子息も二
 人あり當家滅亡の後名字を殘さんとおなをり
 へ一夫をささけおろち奉らんと早雲寺どのく
 御さくるよかぶへうら以と申されしは是を

きくをの大将の御さくるの廣さおさのハ却て
 せらと感いけりさうはま四月十六日の夜竹浦
 口の皆川山城守廣照百騎を引率して降人
 みいでたり關白殿下大よよろこひたまひ城を圍
 むるいさ日數も經さほま降参そのとめよ
 とて山城守を懇みりておされけり

皆川正中録入皆川山城守廣照入小田原竹鼻口
 入あり下野皆川入の關口但馬守河津石見守川
 田因幡守植竹三河守河野伊豆守渡邊丹後守以
 下都五千餘人みてたて籠るけふ天正十八
 年四月四日上杉淺野の人々より使者を差こ

關白殿下の御錠なり。城をこころしへと。あま
 かり。城代のその關白殿下の御錠をいへ。早々
 明退申へく。いへども。城主山城守小田原よまか
 ぶあり。我々の山城守のさうぶをうけ申せ。以
 して。此城御こころし申せ。れを小田原へ申はら。せ
 志の間御猶豫く。いへ。いと申志ると。許容
 かく。五日大柳口より。淺野の勢小野寺口より。松
 平修理の勢出。よせけ。あまより。皆川方も出合
 取。よく。軍。け。と。よ。せ。手。目。あ。ま。大
 軍。り。同。八。日。終。り。城。代。の。侍。一。人。も。此。ら。以。て。戰
 死。し。く。應。永。元。年。よ。り。百。九。十。六。年。相。續。お。し。め。る

皆川落城をよひけ。同日十六日。廣照駿府よ
 け。い。く。降。参。志。し。け。こ。と。の。別。本。家。忠。日。記。よ
 四月八日。皆川山城守。廣照駿府。い。ひ。て。降。を。乞
 と。し。り。る。皆。川。落。城。の。日。を。誤。り。申。り
 關白殿下の氏政身。あ。ま。の。一。兩。人。降。人。い。て
 の。落。城。の。方。便。あ。ま。へ。甘。繩。あ。ま。り。た。る。北。條
 左衛門大夫。の。別。心。あ。ま。と。お。不。好。あ。り。降。参。し。た
 ら。ん。い。本。領。安。堵。相。違。あ。ま。り。申。り。誰。を。左。衛
 門。大。夫。を。志。し。た。ま。の。か。ま。や。と。仰。ら。れ。い。か。い
 駿府の御下知。と。申。り。都。筑。左。衛。門。尉。松。下。三。郎。九
 衛。門。尉。か。孫。と。左。衛。門。大。夫。と。知。人。申。り。申。て。見。ゆ。へ

大隆寺土額卷十六

三

とて、西人を左衛門大夫と許し、托きむかへせらる。關白殿下の御さうりゆりありと申志か、左衛門大夫仰へさへ、形を承り、何の恨もかき、民政氏直を見まて、敵方一味をいひて、同心せよと、いひ、松下一族あり、なほ、龍達和尚といひ、左衛門大夫、墓所龍寶禪寺の住持より、氏勝と年来師資のちぎりあき、又駿府より、本多忠勝、榊原康政、井伊直政御使とて、参向三度よをよみ、是よ於て、氏勝御旨よき、かひ黒衣ふ袈裟かけ、四月廿一日、關白殿下へ出仕し、けし、とふとも、本領安堵の御書をあされたり、これを始

とて、北條家譜代重忠の侍志水、上野守り、出家入道して、城をり、降参し、佐倉土氣、東金、藤南河越下妻、いひ、降参し、たり、けり、あき、駿府の御勢、小田原へよせ、たまひ、けり、三枚橋の城主あり、ける、松平周防守、康重、佐野口より、宮城野のあり、北條より、兵伐り、いひ、首八十餘級を得たり、あき、於て、宮城野湯本、竹浦をまよ、兵士等まへ、小田原よ、逃る、これ、北條家み、か、ひ、最初

の合戦形

流布本松平周防守康重先陣として、小田原よ、か、み、を、て、井伊兵部少輔直政、いひ、みて、御先

并山中本丸合戦の事

渡邊勘兵衛正今年二十八歳督方まさま壯ふる上
 武藝まゝ世に托るされし一か止り山中の城の任候
 よりして城責の次第もへり十分の勝利を得しと
 まと弓矢の冥加といひいへりさうや又その勝
 利を得しと陰徳の報といふべきなり勘兵衛幼稚
 にして父母をうしひまとも身ををく所かかり
 けふり母方の叔父なりその頼りけふ僧も
 めて伊豆國小土肥の清雲寺といふに在よしを聞
 ておれだも母うかこおろともかくも行て計ら
 ちやとおひたち十餘歳の時とていと都より東

海道をくぐりけるみ元より貧しき身なりたびの
 かけておぼももろくしから孫ハ多くの日夜をかさ
 孫てやうし伊豆國又下まつき小土肥の里に
 たり清雲寺をたづねつはり寺におととも頼りて
 下り僧ハあらはさうとてこの僧をかりを頼り
 一人としてをい遠くきこりてその城その行
 衛いふふかつしと知まふしと志をうし打歎けば
 寺におつたふの哀なりよしとを尋ぬと
 去年の冬日金嶺みり山犬はいておひ命を殞せ
 僧のありはを何處の人ととあらされとも非
 命に死せしをあらとて其所の人々有へりやう

小沙汰しゆ、取収めて後、清雲寺の客僧とて、
 てど、その客僧こそ御身の叔父にて、ありのらめ
 といへ、勘兵衛幼稚のあゝ、あゝ、尤て、吾叔父か
 である人を、猛獸のため、命をおとす、おとす、然
 入るも、その客僧乃所持せし、のやあ、おそれを見
 の、弥たし、か、吾叔父からんと、知へ、き、め、の、を、と、云
 の、を、を、ひ、て、さ、て、り、か、あ、き、小、人、か、あ、我、々、心
 付、さ、り、け、い、よ、と、と、その客僧の、日頃、ま、ま、の、房、子
 い、て、見、し、小、持、佛、持、經、の、その、ま、く、ま、く、て、在、の、い
 人の影、も、形、し、あ、を、ふ、し、同、房、二、人、と、見、え、の、い、は、
 犬、も、あ、ひ、し、た、た、ぐ、一、人、さ、く、と、我、叔、父、た、り、か、子、犬

小誤たし、と、り、お、り、を、あ、お、心、く、ふ、し、と、け、び
 け、を、寺、の、檀、那、の、鈴木、某、と、り、幼、稚、お、し、て、さ、く
 と、叔、父、を、た、つ、孫、し、こ、海、さ、し、よ、り、悪、人、お、あ、ふ
 ま、し、き、形、う、我、を、助、け、て、その、拵、を、見、え、
 て、ん、と、お、り、ひ、定、め、い、り、小、人、頼、り、人、お、く、
 あ、ら、い、さ、た、ら、又、犬、も、身、を、あ、や、あ、り、か、そ、れ、ル、知
 志、や、か、く、便、宜、の、志、は、く、ま、く、こ、く、あ、り、て、待、た、ま
 へ、我、の、い、や、し、き、民、お、れ、と、此、處、又、久、し、き、あ、の、子、
 て、山、を、も、野、を、り、犬、か、く、ひ、ろ、く、め、い、し、ハ、川、狩、山
 獵、く、る、の、ま、く、お、仕、た、ま、へ、や、と、い、ら、れ、て、勘、兵、衛
 幼、お、心、又、世、お、た、の、こ、お、り、我、を、か、く、ま、て、い、さ、し、
 八

嬉しきよと身よりぞぐく思ひしかば兔も角も
 鈴木うかしのまきも此處小足をとぐめ四五日を
 とくしけふちよいのしう處の案内を知りしは
 桑の古枝を打ちり弓をはくり芋をそぎて弦と
 かし竹をためる箭柄とかし鴉の尾をそぎて矢と
 なし竹の根をけりて鏃として兔や鹿を射て見
 しまおのひのふく貫きし弓矢のちからを手ま
 出せ扱せよりして山又入三日も四日も山よ
 又山を獵くらし十余日ふしていづるころあり廿
 余日ふして出る日もありいづるたび又清雲
 寺よりくらの客僧の墓をそふへくかくかき

口説をきけりこの獸御身の仇りせむあらぬかハ
 去らされとかからし人を傷かふ獸ありよりそや
 くら射とめてひなるといひくそのまき山より
 まき山犬をめとめけり鈴木ルのち入ハ是を去り
 幼稚は似以くろ乃底のたけきと鎮西八郎の
 ハ見せぬむかし形をよびはる弓取りやく
 まで雄しき人のを去り去るもせし猶いさけあり末
 代不思議の勇士からんとを忍をたのきて育ちけ
 るか勤兵衛山よりて凡三十余日いでされハ如
 何みり仕りん弓矢とり手きありとル又誤ち
 のかからとやと鈴木大よかかして日毎五人を

いして山より谷をたつ孫りまゝしてとふら
 乃山の山懐又人を二人見いしてたつ漸々ふして
 ちかびきほくこれを見れば一人のまかへくも
 あらぬ勘兵衛あり二人の去年犬は誤ちせしから
 んと思ひさめ清雲寺の客僧ありいさみいと
 たづぬとて去年の十一月日金嶺をこゆとき山
 犬の峯よりしよいてあひ同行の僧一人ははのよ
 誤ちして犬のためま命を落したり我の仕合を
 かへよ立たふ塔婆を以て犬とたくかひしやと
 ふ犬の山ふかく逃入たり然もて同朋の僧を傷
 たせ我一人清雲寺へもかつりかくしはくまも

て犬をうちとりおれを面目まかへらんと山中ふ
 けりて犬を秘らひしかどり犬も心さう我等を
 忍せり逃してくれ影も見えぬふ是なる小
 人の弓矢をとりて山おけり犬をかふおやあふ
 てことの本末たふいささう処なりといはふ
 まう小手お手をとりて互におよとあさみなり是
 より叔父の僧と共に清雲寺小年月を送り十八歳
 の時叔父の僧もうせしうが上方へとつらうが
 尾張國ふいさう頃本願寺の下間某か旅宿へ強
 盗のいさしを捕えしより世お名をいられたり
 とかやかた事おより伊豆の山中の案内よく知

たむば此城せめふた一人の大功を立つる
と勘兵衛この邊の山より山はさし谷より谷の
まうく大鉄炮それの尾の上は幾十町との谷かけ
を廻りゆけ何れの尾の上は幾十町との谷かけ
てありたる山よりあり間宮豊前守がきつていで
一ぞあの山つゞきの谷合より横矢を射ることよ
かすらめ松田兵衛大夫はあの丸よりいづらめ
あうらばとく小弓のりの彼処に鉄炮をふせかけ
やとむろ一覺えし山獵ふせとをくむりしあて
がまへそれ今日軍の手くむりふとありし

よらぬ事共なりはさとも間宮一統五十一人さ
かみ關東の名をあられたる老兵かくはるひ
く打つよ射れははらぬを突もせぬ人も人並
みもくれ多く上方勢を亡せしなり申も殊
見事よむえのは豊前守好高年はりて七十三
鎧をぬいし咄輪をかり薄紅梅の鉢巻し小手を
はしと滋藤の弓も山鳥の矢たをさし馬かけを
る下と射る射る佐矢はさらみかし二十余人
を射倒し扇ひらきせらちつらひ老人のいらさ
腕たむひひあから此まよひさかへきへ
ふ非をさし敵よりあふく死もやと十文

字の鎗をどう上方勢のうまをきたる真中へ北條
 譜代の侍の間宮とりのゆとつをやりて三四人
 を法をたをい猶もまをいむれを誰みはありけん御
 老体の御をさらし見事な御相手ふりたりゆを
 孫とのあや乃誓古のためといひあから鎗を合
 せはか何とやいけん間宮うため眉間を法かれ
 るひをさうそく是をいそ間宮どの御手のうち
 恐をいりるゆいご一鎗とかけむかひ七八十合も
 突あへど出らぬ勝負も見えりゆ間宮ハ鎗をふ
 げまてく太刀をぬいさ切さかりまその武者の弓
 手の腕をうち落しそのまうちより組ふせ首

をやくんとせし処へ五六人落かきあり終り間宮
 城うちたりけり是をいくさのちりめみく總軍一
 度まこも入へ何れを何と見えりゆ

重修真書太閤記十一編卷之十六終

重修真書太閤記十一編卷之十七

山中落城の事

并葦山城寄手難戦の事

伊豆國賀茂郡山中城の三嶋より今道二里余上方より弓手よあさうてかまへたり此より小枯木大枯木石割坂甲石坂ふといふ嶮岨のさちをきて舊藪う原ふ至まの伊豆相模の境ありぢれより風越赤石むかふ坂へのむもまくる難処ありこくをばたやまを越せしとたのらみ山中城たちまちよ乗破らる城主松田兵衛大夫康長の戦死加

くはるゝはほそのその方からての。有まゝとのおり
かたへまかくの申ぞとや立退けよと言葉せり
くいひきとせばこの口おしき仰かみさきと下臈
あり討死の御供をふし得まゝとて殿と思て
はる我身おせ口惜けよおとせいやしき民の子か
まどもこの十餘年侍の家は養もとせよとて
さしに御子様かみも劣るまゝ御覽にへ卑しき
そのく軍にかくあそはるまのこといふよりそや
く三三十間へとでたる上方勢のその中へ太刀を
ぬいぐるまゝ入れたるひもよらぬ処おとす矢も
ふ三四人をさうたをさしおの場を一足も去はし

討きたるへけおげも又かきめらる備前守へ只
惘然とてせんかきと成云つはより何くら若き
そのを殺しゆる事のくやしきよはらへ汝を試
んとく然いひしよの非のふを早まうしおとの
口惜さいまおれりも汝の跡追死出三途をり一
所へ越んといひもをてぬみ四處藤の弓おつとり
はしはめひきつめ大その射は射たまゝか上方
勢誰とひ志らへ十六七人の射落さる今矢種も
つきたる罪はくまゝ何か人を多く殺さんやと
いひひの鞍の上みく手を合せ西もむかひて念佛
しおめくち小田原のやぐまらちむかひ我等の防

く力のたらしとして敵を是まで引入たせし城の忽
ちち落されたりはりとてせれり一人の罪みハ
ひと只今申ひけし腹きりひといふ聲とせりみ
鎧ぬきとて膚おしりけ胸もとより十文字の
かきやめり太刀の柄を口は銜え馬より真逆に落
ひきけらぬかきと死せり敵これをもて栗本備
前守と名乗りと覺えたりいさね年も相應み見
おれを自害の首とりせんかしてとて首をはたせり
取せりけり

栗本系圖に土岐定明の末子大膳亮定澄近江國
栗本郷に住ひしは栗本殿と人ハいふその弟清

圓坊といひし東山どのみはかえり幸阿弥と
いひし同朋あり定澄の子大膳大夫定國その子
大膳大夫定房その子大膳亮光房關東みくく
氏綱み仕ふ光房長子とふもあ頼茲その子備中
守茲文氏直と共に高野山みのり氏直死して
のち牢人し替り子源左衛門茲正のちみ兵庫と
といふ江戸み奉仕とといひし
又一本は北條左衛門大夫氏勝ハ左京大夫氏繁
の子なりといふ氏繁ハ左衛門大夫綱成の子か
綱成實ハ遠列高天神天方両城主福嶋上總介
正成の子あり正成戦死のちちかこありし

大問已上編卷下

を氏康とつたてて。天文十五年甘繩の城主とか
〜あり。氏繁の天正六年四十三歳入て。早世し
ひとの氏勝天正十五年廿八歳入て。嫡孫承祖た
りといへ。今年ハ三十一歳あふへ。降参の
後上總岩富入て。一万石被賜たりといふ。慶長
十六年五十二歳入て卒すとといへり。
又氏勝山中を落て箱根へや。又落つはよ。阿部
河内守も見とかめらる。越えよ。道もまよひ。葦
山のかくへ。落れき。か。やう。み。〜。樵夫の
道をたつ。浜久野をめぐりて。甘繩の城へ入。〜
記を

葦山の城ハ北條美濃守氏規のたて籠り。ふを北
畠内大臣信雄公の勢をち。め。蜂須賀阿波守家政
福嶋左衛門大夫正則。長岡越中守忠興。蒲生飛驒守
氏郷。森右近大夫忠政。中川藤兵衛秀政。戸田民部少
輔以下一同もを。よ。せ。た。〜。一息も乗いらんと攻
立ふ。〜。葦山の城といふ。伊勢新九郎早雲入
道の居城入て伊豆國田方郡あり。小田原より。各
未申入あ。〜。山中より。南も阿。〜。行程三里子
遠。〜。蛭ヶ嶋口の門。和嶋。西乃門を。ハ十八町口
といふ。〜。より。北條ま。〜。十八町あ。〜。北へ。〜。西
北を一色口といひ。東北を小田原口といふ。よ。せて

大岡記上編卷十二

五

十八町口より。まぐめハ城中より。爰を先途と防
まけりよよ。血ハあかる。紅の浪をたぐよ。一
骸ハはんで。刀枝の山をふせとも。勝負はらみ見え
こハ以追ハかへつ。せうあみ処。城門をひらき
横田越中守小笠原十郎左衛門尉等福嶋正則
陣ハ真一文字ハ法い。かくはこれハむか。正則
幼稚みく人の子を殺し清洲を立の。小田原
まぐ。福嶋左衛門大夫綱成。もとみ草履取して
居た。時を知り。はぬ。横紙やぶ。正
正則かれとも。その人の顔を。そのむ。主
とたの。左衛門大夫。傍輩。正則馬上立

あつ。敵ハあひ。小勢。吉村又右衛
門大橋茂右衛門福嶋石見蟹江才藏等ハを。あ
ぬ。一揉み。落せ。下知。承。吉
と。吉村又右衛門四尺。あ。太刀。真向。ま
。面。ふ。か。人。城兵。吉村。見
。是。あ。む。左衛門大夫殿。草履。居た
。市松男。郎等。あ。と。攻。ハ
大橋茂右衛門福嶋石見蟹江才藏等吉村討。を。續
け。と。合。た。城兵。あ。せ。は。是非。み
。ち。取。ん。と。ひ。め。を。討。ん。と。真。先。進
。城。方。の。侍。黒。革。ち。の。大。荒。目。の。鎧。も。同。毛

大岡記上編卷十一

六

の五枚か人と着て長穂の鎗をとり突てかくしは
吉村ハ大太刀形一交もせははき合うち合か
けろ吉村九の股子薄手貞ハかの武者鎗かけを
て組んとかけよはちのりまいろふろーたりん
かへある谷へ真逆子をちりたり吉村手貞か
から谷も此そそく是をさふまふろ十餘丈もあ
まりゆきへ續い入へま子あらはるのうちに城
中より横田越中守小笠原十郎左衛門尉二手子
かまよせてみむかへハ烏帽子形のかふとみ赤
皮を以て大荒目み出ろたる鎧きて清水太郎左
衛門尉と名乗はるいゆふその勢まよまをけく

蒲生蜂須賀の勢たちあわよ突くのせん寄手まこ
ゆる難義せいかハ關白殿下馬廻り百騎をか正を
まよかへ此処へ御動座ありて城の動静よく
御覽ありこの城いろみよ要害よく然も奥山も
はくそたり一旦も攻んとせハ味かく多く損まへ
し攻口をゆるへ遠巻よして計策を不とことへ
と下知したまひいかハいゆき引あろそま
軍を止めろ工夫をあらけり
北國勢平豊後守の城を攻る事
并平豊後守戦死の事
北國勢の中ハ長井右衛門大夫といふものあり是

ハ上列三河山の永井豊前守の弟形。兄豊前守を
武田信玄の幕下み。上列先鋒衆のうち形。去々
は。豊前守死してのち。武田家滅亡。その。上
杉謙心も。逝去あり。ハ。北條氏政關東。又。跋扈
い。ひ。ま。り。その旗。下。は。付。々。は。処。は。永井右衛大
夫一人。北条。ま。ま。か。と。い。う。か。ふ。勢。か。ら。北
條。と。ま。を。合。戦。した。り。ハ。と。も。援。の。勢。は。か。け
ま。ら。終。は。落。城。し。け。ふ。ま。より。兄。豊。前。守。ハ。藤。田。能。登
守。の。取。次。み。景。勝。は。仕。へ。藤。田。組。下。と。形。居。る
了。か。ハ。今。度。の。合。戦。さ。い。と。い。わ。る。如。何。み。ら。し。て
永井を三河山へ。か。へ。い。ら。へ。と。お。も。ひ。藤。田。う

計畧み。三河山の地下人へ。北條滅亡遠から。一
去。ら。ば。舊。主。永井右衛大夫。か。へ。り。ま。お。へ。其。方
と。も。と。や。く。思。案。を。め。く。ら。い。へ。と。申。は。ら。し。ま
か。ハ。三。河。山。の。里。人。よ。ろ。こ。み。と。も。さ。ら。し。く。當。時
此。邊。は。北。條。家。の。侍。と。て。ハ。平。豊。後。守。一。人。み。ら。い。ら
み。ら。し。て。この平を御攻。か。せ。し。ら。へ。ハ。豊。後。守。を
討。ら。う。ら。し。ま。誰。み。て。も。手。さ。げ。し。の。れ。と。と。答。へ
け。ふ。ま。より。藤。田。能。登。守。天。正。十。八。年。三。月。廿。五。日。申
の。刻。松。枝。を。う。ち。た。ち。八。里。の。道。を。た。ぐ。一。息。を。と。り
その夜。寅。の。刻。は。平。の。近。邊。ま。を。つ。き。あ。り。み。て。人
馬。の。息。を。休。め。地。下。人。と。も。を。かり。め。よ。み。入。り。明。る。廿

六日卯の刻み平へかよせ前後より追とりまき
関をどいと作^つ鉄炮を打ち短兵急^{へい}めせめたて
けふ不^ふど^と豊後守肝をうば^いハハ^ハせん^進ル
我身^{わがみ}一の力^{ちから}み^と持^もち^とえ^へき^みあら^とと思^ひ
一子市^{いちしち}郎丸^{らうまる}を人質^{ひとしち}と^{して}降^{くだ}を乞^こけ^ふ不^ふど^と藤田
是^{これ}をゆ^と平^{へい}の錦^{にしん}を^は破^{やぶ}却^やか^し藤田^{ふじた}ハ三^{さん}山^{さん}へ
ひ^ひ平^{へい}は^は永^{なが}井^いを領^{りやう}主^{しゆ}と^{して}仕^{つか}を^を系^{けい}たり^と豊^{ゆへ}後^ご守^{しゆ}こ^と海^{かい}
から^か藤^ふ田^たと^{して}降^{くだ}参^{さん}し^とい^とど^と譜^ふ代^{だい}の^まて^とあ^らう^と
北^{きた}條^{じょう}の^息つ^とれ^とく^とと^{して}鉢^{はち}形^{がた}の^北條^{きたじょう}安^あ房^{はう}守^{しゆ}氏^し
邦^{くに}へ^の事^{こと}の^始末^{しまつ}を^注進^{しゆん}し^とか^つ藤^ふ田^たの^体を^見ゆ^と勢^{せい}
ハ^三千^{せん}と^あま^りの^四千^{しよ}と^足ひ^とお^はな^えゆ^とま^り永^{なが}井^い

大陽言二終卷一七

右衛門大夫が勢ハ百餘騎とハ見えゆへとも多く
ハ三山^{さんざん}の地下^{ちか}人^{びん}お^り事^{こと}の^終つ^とと^{して}志^しを
を^のぬ^ゆハ^いそ^と御^ご勢^{せい}を^むけ^られ^ゆへ^いと^し終^つと^{して}
ハ^藤田^{ふじた}の^備み^加え^とり^とい^とお^はな^えゆ^とま^りあ^れ程^{ほど}
よ^きと^ふん^と裏^{うら}切^{きり}仕^{つか}る^へと^し申^{まを}を^りけ^ふ北^{きた}條^{じょう}
安^あ房^{はう}守^{しゆ}氏^し邦^{くに}元^{もと}より^思慮^{りよ}あ^らず^と大^{だい}将^{しやう}あり^とハ^豊後^ご
後^ご守^{しゆ}の^使み^むら^ひ注^{ちゆ}進^{しん}の^祭祝^{しゆ}着^{ちやく}せ^りは^らハ^四月^{げつ}
八^{はち}日^{にち}吉^{きち}日^{にち}なり^と七^{しち}千^{せん}餘^{りよ}騎^きと^しせ^むか^ふへ^とその
手^てハ^かり^とか^の手^てハ^あみ^とと^し委^い細^{さい}と^し言^いふ^とめ
と^かへ^とた^らと^し志^しを^なし^と氏^し邦^{くに}の^近習^{きんじゆ}と^し志^し津^{しん}帯^{たい}刀^{たう}と
い^ふゆ^との^あり^と元^{もと}ハ^藤田^{ふじた}の^侍あり^とけ^ふり^と故^{ゆへ}あり^と

大陽言二編卷一七

九

藤田小勘當せられ氏邦も志々かひ居たりけふ
これを功も歸參せよやと思ひふたかみ・虚病して
藤田陣もいづくまかくと志らせたり・藤田この事
をまき・何茶はるどやあらんとく更もむりあはせ
まかひ・帯刀の虎の尾をふりあちして・鉢形へ
かへりける跡も藤田甘糟備後守をま孫をこの
事いづくまへと評定しけるも備後守志を案
して申けふも豊後守の關東もきこえし・大力の勇
士も容易もうちかへし・いひまもたをやり
これをまへし切手の神保五左衛門・夏目舎人助
二人たふへしと申し藤田も元よりたやうも思ひ

大陣言二終卷一十

七

しとあまのその義も取まめかひのひくみして
みろしたらは後悔その甲斐あるましとやく呼せ
たまへやと評定一決し座敷を志つらひ豊後守を
呼けしは豊後守あやし何事のありきよを
みや我の降参の外はゆその形もたやうも親しく
いとほへ身もあらはこれの頃鉢形へ申せ
しこの漏たるあらんよし藤田いりもか
とも・我れか一人やしと死をましり
覺悟し藤田り役所へいりけり藤田り役所も
何事やらんこの邊のうかれめと八九人あ
まろく扇をひらき手をたき手唱ひの舞ひささ

大陣言二終卷一十

七

しく見えたりけり。いれれも十七八の眉目よく聲
うはりきその相子をとりかかづけあ中よ藤
田もいたく取らる。舌もまらぬ。田舎ぶ。ぞん
とろく。とろろある。釜も湯のたきゆ。やたきゆと
うらふ処へ豊後守ゆとさ。出たまの藤田きゆと
見て豊後守これへおをせといひあから。手を取
座敷へともかひ游君ともの中へお。あかせの豊
後守もあされとて。そのをい。居たりける処
へ。游女とも。前後よりとりか。り。盃をま。むはな
とみ。豊後守もあ。ア。を見ま。たちかへらんと。
おひけ。きを見て夏目舎人助。腰差をぬくより早

く豊後守も真向めかけて切。切は。豊後守も。海
とや。その形。夏目入。目。かけ。二尺三寸
の大腰。藤田。腰を一。か。み。と。ら。ひ。き。り。み
そ。う。た。ま。の。藤田。ち。と。ぎ。し。き。を。引。ま。の。ま。の。と。り。
神保五左衛門。豊後守。み。ま。り。む。か。み。豊後守。神保。り
太刀の志。を。く。ま。く。甘糟。ま。き。り。か。い。を。舎人
助。た。く。ま。か。け。豊後守。り。か。き。き。二。三。寸。き。り。込
たり。豊後守。手。を。お。ひ。か。い。ま。を。お。し。も。屈。を。以。藤
田。甘糟。二人の。うち。を。と。お。り。ひ。き。り。ま。り。な。り。は
を。五。左。衛。門。舎。人。助。前後。より。引。ま。の。ま。の。と。り。ひ。ま。是
を。う。ち。と。め。たり。藤田。神保。み。の。豊後守。り。帯。も。たり。

關兼定の腰差をあらはす夏目は豊後守を乗る
 馬をあらはすたるこの馬は豊後鹿毛とくたけ
 八寸あまりの名馬なり
 流布本は神保の初太刀夏目の二太刀と最初
 やくせし夏目の鉦子も豊後守もちかく神
 保のはかみくその座をよりよろしく夏目初太
 刀をうつ神保二太刀をうちたるこれハ夏目の
 さをたふすおらひ神保の後れたはふもあらは
 今二太刀の神保を以てさくめらしく初太刀なる
 夏目を二とさかると藤田のひりすを注
 記の説と同じけきとも元より

欺かりく豊後守をくらんとさかふハ便宜
 よりく誣しあふへしは兼初太刀二太刀
 の順序をかきせしむるあふへしはよりく本文
 乃ちよりくこと

重修真書太閤記十一編卷之十七終

重修真書太閤記十一編卷之十八

佐野口合戦の事

并松田尾張入道逆心の事

藤田能登守信吉と平豊後守をうらむとすその後
平居所へハ竹股松本の両手ハ跡部甚内を相添
さしはらちし追手搦手より十重廿重みとらひまき
そのうへみく跡部甚内真先みきく大音聲み平
ら家臣等たしかみうけたまわれ主の豊後守二心
をいぐや旧主の北條家へ内通トハる趣露顯した
はみよりたちまぢみこれを誅せらまてり其方共

大隆言十一編卷十八

主と同一く身をおしとせんとおもはく。この館子
よつて運を天に任せぬべし。主の不義不與
せしとおのめ心のまじり立のぞ申しへ
まこと。當手より市にまひ申す。と呼せり
かは正ら家臣ともいひ。是も辱か。我々のちかき
順より身をよせしものどしなる。何とて死をとる
みまへをとて。あしを。立のきたり。その中は
平ら一族みや有らん。平主殿といふ。そのまじり
不とふる侍三人。大手の門を。ひらき。敷皮し
る。い。ま。寄手の御大将。何と申御方みや我
等。寂期の申処を一通り御せ。いへや。我々の豊

後守ハ北條五代の恩を受し。そのみいへハ北條と
共ニ死生存亡をおかしく仕るへき。そのみい。然し
み不時ニ御勢をさしむけられ。折ふ。我等かとも
をりあひ申さ。いより。所なき。御陣へ。降参仕
ま。いへとも。その本意。い。み。故主の北條へ
か。つ。い。と。日。夜。朝。暮。い。と。申。さ。い。は。る。み。い
又。間。を。ら。か。い。い。を。志。津。帯。刀。と。申。す。の。か。つ。り。忠
仕。り。い。ひ。い。より。豊。後。守。を。御。討。た。せ。れ。い。ひ。い。形。り
志。津。を。あ。ら。せ。さ。い。ら。き。い。定。め。御。陣。中。御。騒。ぎ
い。へ。た。く。志。津。を。か。つ。り。忠。り。故。主。の。恩。を。思。ふ
さ。く。あ。い。く。新。主。の。め。く。を。い。は。る。い。い

は止ハ豊後守ヲ所行として不忠不義との申さ所
おしくひ帯刀ヲ北條とのよヤおたれは出とわ
三年四年又もをよひひ豊後守御陣へ参りて
たるがよ四五日の間みひ北條とのひ帯刀をうち
とる内とやとおそ思召ゆらんおれたぐい又鼠の
出とくみげちよ正の犬侍と我等らこつ所さしと
の同下からひはとて我等たぐ四人おつ御勢よ
むかひ軍仕りゆとも運をひらくへそよあらは
又とく正一主の豊後守らかこそよおとす
おとひ一矢射てそのち腹さる豊後守とおしるよ
死出三途をこへそよみくひといひもそてぬよ四

人一同よそらるるおのさのやのてげし寄手
おもくは二三十間ひをさるるぞ欺かられけり其
義からひをさるることいはとよといふそのもあ
又よとの道理おつ豊後守ヲ所業ふくむへそよ非
まといふそのもあつまらためらふ不どみ四人
のそのひ尋常よ腹かきさるる失みけり是をそ
人まゝ大よおどろそはさるる豊後守のよ侍
をめちさるる道理はささるる剛よ弓矢と
その身のそらそ世よ多かふまを侍かか
る是をそめのかけり上杉霜臺このを聞
たよひ平一子市郎丸といふそのをよひい

その方父豊後守景勝は對し野心をくもるてしよ
より組かしらの藤田うためまうたりたりは是共
其のうけあさる故主へはくを眞實心はらみみ
くむへさよあらは北條も今のめつ不うたりたは
豊後守いりみおのひとせんあかほへしその方
の我まつりへう忠勤ををげめよといひ渡されし
か中二年ありし市郎丸病死したるけし平家
ハふやく断絶を
平豊後守ハ上列蓑輪の城主内藤修理亮の組
る平四十騎の分限あり高山白倉あつて組合た
るその地の上野甘樂郡あり

はくまへ駿河の御勢を北條と隣國のててあり
且あつて縁者のあつてあり一際目よたつ働
しつ關白の御感よ何のからをとおめいし
天正十八年四月朔日駿河のせんろ松平周防守
康重佐野口よりまゝて宮城野口におり奇々
を小田原かゝの侍松田上田ふとをちめこくを
専途とふせをたくかひいかにし駿河勢短兵急
せめ付しかり小田原勢うへりその八十餘騎
をよび散々ありし小田原へみけさうたり同
る二日父世三四郎坂部三十郎をそのころ箱
根みおらむかゝめそのうち御陣を箱根まきめ

大階記上巻第十

三

たまひ葛籠をらみ於て戸田三郎右衛門忠政をめ
され御こしよけせたまふ処の采配を賜とりて
その方この采配を以て後殿をかまへしとそ仰付
らまはる忠政眉目をえどこ随分にく流を流く
くてもうまはるけをいひまはる武門の名
誉と羨とけり

久世三四郎廣宣の平四郎長宣の子永禄四年辛
酉の生れ形今年三十歳御入國の後上總横田
村三百石をたまふ坂部三十郎廣勝の又十郎正
宣の子三四郎と同年形共は大須賀五郎左衛
門尉康高の組御入國の後上總國横内村三百石

を賜ふ

かつ久世坂部の存候を感しお不しめされたる爰
ふ近江中納言秀次卿の駿河の御勢よりひきけり
まふおしたまふへきさめぬけり何とらお
不しりん駿河の御勢をかきつけ無体まかけ
たまひけふを御覽せらまはかくてハ駿河の御勢と
必定爭論起るべくおなされハは御使をぬつ
陣をのこことや採る殿下のさどめたまふ処ある
をむたハ破又たまふ王まはへりハ次第を
守まておしたまへと仰られハは中納言との
扱らまはりして無二無三まおしたまへハ果して

駿河勢の先手衆あらえひをては同士討さへく見
えしかりかみかみ村越茂助を御使ひて駿河衆を
制したまひふくひ中納言とのへ仰られはは
御着氣せへたやうみせせたるかとおありきと
申ふはゆきぬともこの山道ハ東國第一の切処
はかつた敵陣ちかくはあより御勢ハさきまき
見えは過ちひきい敵ハ利をばらんを去り
はへりはよく御思慮あふへくはと仰り
とけはは秀次卿御法の口の状たかみ承
りてはちく御勢の先手衆あより志どけ形
見えはよきおの勢をばしそへははは

不也此処ハ秀次次第よかしたまへくは仰ら
しハ茂助まかりかへつるかくと言上ふをよ
そのとを駿河衆ハ村越の御下知を守り山は添
陣をとる秀次衆へいよき出さしおしけは
へ北條方の福嶋伊賀入道南條山城守以下古兵の
剛のそのまきまき三百余騎山合の道を
えはく鉄炮をうちかけ畑のいまたえさる間
より鎗をいし左右をたきけり杉さきやう北條
流の手柄を見せんと案内あつたるはまりく不
敵をえらるるちりしハ秀次卿の旗本きりたて
らし狼狽をり形見ははさへ雀部淡路守

大朝日記一編卷下八

六

熊谷内藏頭おもてもふらひ突ていそめりかへさ
んとそへらく伐さく福嶋伊賀入道例の鉄の棒を
打ふりくやくさくさくよりうちひ下を志やは散々
をんと深山おろす秋の木の葉のとへまよく立足
も形くまく立らまひくもひうまはまよくこもや
らひ打まぐめられ如何のせんと懼怖は馬をたて
たまふより伐まごころめされ尤もひゆるまよ
はりとも援きて止へま井伊兵部少輔の居あそ
さくはやと仰まよりさか一やうみ赤らふらぬ
の具足きて三四百騎真先まもくめり松平周防守
いたら貝の前立したる境は黒いとのよろひ黒を

馬も黒鞍をそとれしをとらぬ侍二三百騎前後尤
右まひきぐして小田原勢のちあるつたる真中
へ面ゆるらひ切さくは是をきて南條山城守敵
みあらでの加さうたりまうも駿河勢とた不田は
形う只今海道第一と名譽の大將軍形も我や爰の
引て味方の氣をやりかへる必形うまやひけ
ととせまむりさ下知しけとりか祿さよく調練
たる侍ともあり我手足を伝かへる如くくつかへ
くりかへ引あけたるかてて秀次卿も希有ま
る道出たまひまらまらまらてのち秀次卿より使
を以て餘り逆るさ死地まひりひしを御勢まよ

子引取^{ひきと}りて今^{いま}もきりめぬ御恩^{ごおん}よと申上^{まを}られけ
 ぶを聞^きめし此方^{こなた}よとの久世^{くせ}三四郎^{しやうざうらう}を以^もていくさ
 のからひ勝負^{しょうぶ}の時の運^{うん}よゆそのみゆ御勢^{ごせい}の軍
 ぶりけらふありそとの見^みうけをゆこの後^{のち}御油断^{ごあぶたん}
 かく御^ごかせをゆへと仰^{おほ}けらるる色^{いろ}ゆへに近江中
 納言^{のうごん}どの赤面^{せきめん}してまぢりけりとあり小田原勢^{おだわらせい}へ
 秀次^{ひでむね}卿^{きやう}の勢^{せい}をやふり勝利^{しょうり}を得^えて味方^{あじかた}の銳氣^{えいけい}を増^{ぞう}
 去^さるるを形^{かたち}とともこれる為^{ため}に結句^{むすぶく}駿河^{すまがは}の衆^{しゆ}を
 ちりくんと陣^{ぢん}とらせゆせゆの竹^{たけ}る鼻湯^{はなはた}本宮城野^{ほんみやうぢの}口
 の軍勢^{ぐんせい}ともいゆせり小田原へひそまざり氏政^{うぢまさ}
 父子^{ふし}大^{おほ}おとろを敵^{たか}いふたけく勇^{ゆう}むとも山中

をいたやきく破^{やぶ}らせりとおひひしむぢれり取^とり
 落^{おち}城^{ぢやう}みをよみ箱根^{はこね}の嶮^{あそ}岨^そ入^いて去^さる喰^くむるから
 んといゆせり決定^{けつてい}して心をやきめ居^ゐたりゆる
 そのをとむゆいととも今^{いま}の詮^{せん}あり福嶋^{ふくしま}南條^{なんじやう}畑^{はたけ}割^{わり}
 石橋^{いしはし}の邊^へ入^い打出^{でしゅ}是^{こゝ}をまちむかへる一合^{いつがっせん}戦^{せん}仕^しりゆ
 んとともきりめしを松田^{まつだ}尾張^{おわ}入道^{にやうだう}とくといへる敵^{たか}
 ハ大勢^{おほせい}ありまろも山中^{やまなか}箱根^{はこね}の軍^{ぐん}ありちり氣力^{きりよく}さ
 かん形^{かたち}なり小勢^{せうせい}ありちり付入^{つけい}り攻^{せう}いらせりて
 後悔^{こうかい}をふこしその甲斐^{かい}あるへらゆたが堅固^{けんこ}よ
 籠城^{ろうじやう}をへそありと申^{まを}けふを運^{うん}の法^{はふ}きぬるかか
 さり氏政^{うぢまさ}との儀^ぎも同心^{どうしん}に籠城^{ろうじやう}みこそ決^{けつ}りけれ

小田原城攻清水太郎左衛門尉勇戦の事

并松田尾張入道内通の事

天正十八年四月三日駿河の御勢小田原表にお
よせたり是よりして上方勢のいさし
いとよせたりし城の四方の野も山も軍勢
からぬ如かり旗馬印の風もあひて鎗長刀の時
らぬ秋のそくその穂は似たり城中をきてあ
がをひたぐしむろ武田信玄上杉謙信かよせ
まゝと有りかとも我もはらみかざから
かくては籠城いづるあるへきかんといひあつか
ふるとよ海上の九鬼村上久留嶋さんと船軍を

む祢とせし人々兵船幾百餘艘といふかをもあ
は漕がらへたりこの勢あての當城を手づみ越
ともやくからしかんとこころみらるかへ
いれしも退屈してぞ見えたりけるかはは
小關東も軍も名を得し皆川山城守廣照あ
やちりして百騎をひきひきぐして駿河の御陣
駈しつ降参は祢より關白殿下をり知よしあ
まはれは直に關白殿下の陣へ参上し關白殿下山
城守をよひを急いり皆川そのり事ハ關東の
名家ありかふとよ北條如き催促よまかひひ
るやくをらいつと仰らるし山城守御下向

をまち付奉らんとその間城中入りつゝいかり然
ハ城中の計義お不かく心得れと手配その不
あらまし言上おをよ人關白をらめされ信玄謙
信をためし秀吉をたはぶをおかしけし件の
兩人現在せば北條より先まの征伐あふへそ
をやく死して仕合ふと此うへへ總軍一同一
攻せめ見よやと下知せらるゝ母より諸手ハ
ルも仕寄をいけく楯竹束をいそあらへ同月九日
鯨波をはくく鉄炮をそあかけこれをせむる中
ふも駿河勢の中より阿部左馬助正吉一陣まさく
城方の柵をひそやめりここ入るは城へ城中よ

了鈴木大學助とい人精兵の射手をよまかそへの
名人ありははう矢種およま切てをかつ矢継ハ
そやよあまはかから矢聲をかくは其聲志
しもあうやまは阿部う手のその射らまはせ
ままかぬるを見まぬ清水太郎左衛門尉と名乗
四尺余りの大太刀うちあつ切かくは左馬助
のかまよと馳むかひ一交しせはたくかひは
う九馬助う鎗清水う照よあまはを事とりせは阿
部う肩先ふかくそり付し不どま阿部馬より落る
を清水おかく飛をう首をとらんとちういへ
へ阿部う郎等戸澤善右衛門鎗を以て清水よ向ふ

清水戸澤り鎗をまうをり。一太刀打て馬みのり。猶もとくむを大導寺孫九郎荒川豊後守大森甲斐守以下十騎をかり清水をたまけてかけいのしへ阿部の手をのこるたつを井伊兵部少輔の手よ木股右京菴原主税岡本半助かとうく不のりく如くをりかけはこれよめひく松平周防守の手のそのおあうく掛合たり市はとも清水荒川大森大導寺いのしよ相應よよきくびとらうくひきあうそを城門を固めて鉄炮をまひくうち出したまの寄手さんく又打かやま市はたう氏政清水を厚く賞をらまねる十人ふも同一く太刀黄金を賜を

て軍功をまけす。たまふ清水太郎左衛門尉の伊豆國葦山城ふこもまた石小流布本くも重出したて勇戦の始末を志る以いのしよをの是ある哉あらは志をらく流布本ふ志るのりくも掲出し其疑ひを存く以後の訂正をあらう時松田尾張入道心中ふくうらりようらひおもひ腹心の郎等川上作之丞といふをのを呼いしてひをかま堀秀政の手へはかちまは堀川上をよひいし何事そとをふま。一大事ふひへ殿下へあきよ申止へくと申よより我のよを關白殿下

大朝臣上編卷十八

十一

本言上りけしハ關白あはせへとくめされたり作之丞御前平伏して北條譜代の侍松田尾張入道言上法かよめる意趣ハ主ふくハ截流軒左京大夫二人とハ朝憲を忽緒殿下の約條を扱ふを以て入道未ひいさめはへとも更なめちひ申さひかく侍正及ひはかくてハ當家めつぶる遠かりは出なをひたぐり扱をかり先祖早雲氏綱氏康子うけは恩をおもひひま今の主まかへる件の三人の跡目断絶はるまのりさはやうふとまを念願仕はされこの茶たしかは御托るをがふありはを涯分の忠を法くく申へきふくと言上り關白殿

下りくめされふくき松田申茶かふとハお不しめされのまとし大事のまへの小事形うたかハ城責の手だてをあらとらあひうきたまひ川上法志んて承をせ入道などの不覺人まてあるへきや口申うくはを十分入申上て御為みかるへきとをハあらふ申上ハ扱れみくまよと御ちからハの有へきやと例の大音聲みて仰らまハ御陣中みひぐきころくまそろけり川上をくまよ入道申ひけくハ大事ハ御側の人々をまろ御のけくハ色ひへと申ハ關白殿下御座をちをらま川上り傍みむむと

座まらせたまひ作す之の丞じやうをらりたまひ取とり
 けけても申ませと仰おほられれの作す之の丞じやう聲こゑをひきめ
 るま云ま々くと言こ言ご上じやう以もての時とき關せき白はく殿てん下かいりみる御ご心しん得とく
 ありの事こと成就じやうじゆせい入に道だうをしらし入に道だうをしらし相あ違たがひあるへりに
 と仰おほられしよりまかりかいつりり入に道だうをしらし不ふ思し
 之のめと仰おほせられし作す之の丞じやうをはきとぬされの御ご袖そでの
 内うちより黄金きん錢せんをくりとりいりたまひ給たまはれ賜たまはれ
 と仰おほれしと仰おほられしのまく奥へ入たまへり川か上が上が出い
 せしてふりひりありまて城中じやうちゆうへかつり入りたり其その
 のち殿てん下か堀ほり秀ひで政まさ一ひと人をめし具ぐせられし川か上が上が申ませ
 一ひと路ぢをのりりたまふふ妙まう福ふく寺じ地ち藏ざう堂どうとまさした

三

まへへ石垣山いしがきあり木の間まより見たまふふ小田原
 の城じやうの眼まなこ下したふりるる又また何なにぞぬつつ御ご本陣ほんちんをう
 ひきれかの城じやう中ちゆうふり恐おそ怖おそまへ一ひと早はや々々此こゝ處ちへ御陣ちん
 を移うつせしふへ一ひととりひきそかよ人夫とを集めて木を伐
 柴しばをからせたまひしりり

北條きたじやう五代ごだい記きに石垣山いしがきの作す事じ四し月げつ朔しやく日にちよりまり
 め一夜やの中ちゆう入い出しゅ来らい一ひと紙かみ入いりかべををうりしと云い
 三さん日にち小田原おくだわらを圍かこむといふ家忠いへただ日記にちぎハ八はち日にちの後
 のとり湯本ゆもとの真覺寺まかくつじより移うつるといふ

大階言二終卷一八

のてよふし集事の風流はるる好るしこい
三日此路京は備忘といふは通言路の入り口の
此二切の中人地味はたかきつる入道との事と
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて
此路より路を北山の御所は日附日ありて

重修真書太閤記十二編卷之十八終

慶應元年

